

花鳥餘情夕顔のすだれなどもいとしろう云々といへる注に、伊與簾また萱すだれの類なり、

〔倭訓栞中編阿一〕あしすだれ 蘆簾也、字荀子に見ゆ、天子諒闇の時、倚廬に、まづらはる、物なるよ

し村上院御記に見えたらば、常には憚る事也、難波などには常にもよめりといへり、今すだれあしといふものは、兼なりといへり、俗によし、すといへり、

〔楊升庵外集八宮宅〕藤 莊子注、蘧蔭竹席、今蘆藤也、按三國吳安東將軍徐盛、植木衣葦、爲疑城假樓、

注以蘆藤遮其外、蓋今俗名蘆箔也、藤方肺切、

〔令義解一職員〕掃部司

正一人、掌薦、席、牀、簀、苦、及鋪設、洒掃、蒲團、葦、簾、等事、

〔儀式二〕踐祚大嘗祭儀

天皇即位之年、中次鎮、稻實殿地、中部廻以葦、開東戶懸葦簾、高萱御倉者葺部以青草、

〔西宮記臨時四〕人々裝束、喪服中

天曆八年正月四日、大后於昭陽舍藏、中二十四日撤尋常御簾、改蘆簾、以鈍色細布爲端、冒額

〔金槐和歌集〕すだれによする戀

津の國のこやのまるやのあし簾まとをに成ぬ行あはずして

〔夫木和歌抄三十二〕六帖題あしすだれ

すくもたく難波をとめがあしすだれよにす、けたる我身なりけり、

民部卿爲家

信實朝臣

世中のはてはす、けのあしすだれあしくかけ、るわかのうちみ哉

〔鶴岡放生會職人歌合〕右

御簾編

よなく、は思かくるをあしすだれなどふしく、のあはずなりけん